

# 二松學舎大学人文学会第118回大会

【日 時】 2018年12月22日（土） 13：00～（開場12：30）

【会 場】 二松學舎大学九段キャンパス1号館201・202教室

---

受 付 12：30～ 1号館2階エレベーター前  
開 会 13：00 （201教室）

---

〈研究発表〉 13：10～15：50

## 第Ⅰ会場（201教室）

『悪魔』『続悪魔』論 —— 承認を求める自我の欲望 ——  
文学部国文学科国文学専攻4年 松嶋 洸希

漱石作品の女性 ～ 『明暗』を中心に ～  
文学研究科国文学専攻博士前期課程2年 安養なつ美

李恢成（イフェソン）『砧をうつ女』論 —— 母性像の記憶と民族性回帰への物語 ——  
二松學舎大学外国人客員研究員 崔 順愛

キャラクターから入る文学作品 —— 解釈される作家たち ——  
文学研究科国文学専攻博士前期課程2年 郡 裕子

## 第Ⅱ会場（202教室）

日中山中異界の比較 ～ 『山海経』と『常陸国風土記』を中心に～  
文学研究科国文学専攻博士後期課程1年 李 清玉

『玄玉集』神祇部構成と配列  
文学研究科国文学専攻博士前期課程1年 古家 愛斗

「関東州」における中国人用教科書編纂事情と教材採録について  
文学研究科中国学専攻博士後期課程1年 張 三妮

日本語と中国語における比喩表現の比較  
文学研究科国文学専攻博士後期課程1年 宋 睿

---

〈講演会〉 16：00～17：30（201教室）

インド仏教の日本文学への影響 —— 和歌、俳句を中心に  
仏教学者 植木 雅俊氏

---

〈懇親会〉 18：00～ （13階ラウンジ）

---

二松學舎大学人文学会事務局

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16／03-5962-3304／jinbun@nishogakusha-u.ac.jp

〈研究発表〉 第I会場

『悪魔』『続悪魔』論

——承認を求める自我の欲望——

文学部国文学科国文学専攻四年 松 嶋 洸 希

谷崎潤一郎の『悪魔』及び『続悪魔』を取り上げる。研究の目的は自我が他者に求める承認の欲望についてである。本論においては欲求ではなく、対外的な関係性の中で生じるという意味合いがある欲望という言葉を選択した。具体的には、悪魔主義や谷崎の理想的な女性像を参照しながら、物語における照子の位置を明らかにすることを研究の起点としたい。エロス、官能の渦に巻き込まれていく男たちはどのようにしてその欲望を昇華させていくのか。自己と他者を相互に結び付けるものは承認を求める欲望であるという仮説をもとに、それらを分析、検証していく。この欲望の相互関係は、自分が他者にこう見られたい、特定の他者に対してこうであって欲しいという欲望の衝突であり、それを社会学的・心理学的な見地による論文をいくつか参照しながら論じる。とりわけ谷崎の初期の作品は美しい文体、表現、幻想的な世界観ばかりが目ざされがちであり、そのような先行研究が多いのが事実ではあるが、初期には珍しい写実的な要素を含んだこの二つの作品を、人間の本質に迫ったテキストとして再考するのが本発表の眼目である。

漱石作品の女性

『明暗』を中心に

文学研究科国文学専攻博士前期課程二年 安 養 なつ美

漱石が生きた時代（慶応三年一月五日から大正五年十二月九日）は、日本に西洋文化が輸入され、日本が少しずつ変わっていくとする激動の時代である。そのような時代に生みだされた漱石作品には男女の性差について書かれているものが多い。父権制社会での日本女性の社会的ステータスの低さの中、当時の女性はどういうことを思い、過ごしていたのか。また、どのような苦悩があったのだろうか。

本発表では、大正五年に『朝日新聞』に掲載された夏目漱石の未完の作品である『明暗』を中心に扱っていく。漱石の他の作品でも結婚問題は取り上げられているが、『明暗』では恋愛結婚をした夫婦である津田とお延が描かれ、その津田夫婦の結婚生活がどこかぎくしゃくしている様も描かれている。この夫婦のズレは、西洋文化が取り入れられて、日本が変わっていく中でのズレであるとも言える。本場にこの津田夫婦は恋愛結婚だったのか。また、当時の新しい言葉である良妻賢母の思想も取り上げつつ女性の苦悩について論じていきたい。

## 李恢成（イフエソン）『砧をうつ女』論

——母性像の記憶と民族性回帰への物語——

二松學舎大学外国人客員研究員 崔 順 愛

この作品は作家の生まれ育った故郷である樺太で過ごした日本の植民地時代を背景に幼児期の記憶を書いた自伝的小説である。本作品の主人公である母親の短かい生涯が「僕」の記憶によって繊細に語られている。語り手が、父の暴力の対象であり、何者でもない疎外者であった母親と母の名前「張述伊」に分けて語ることで伝統的な母親像と植民地近代性を取り入れた女性像を同時に書くことを可能にした。母親が砧で「ひびかせた生活の音」は「逆境における朝鮮女性の強さ」であり、「その強さは民族の抵抗の歴史がつちかつたもの」であると思われる。母親像を単に「個人的な性格としてとらえるよりは、朝鮮女性像に通い合うもの」として捉え、本発表では支配国の差別と収奪による朝鮮男性の女性差別と暴力の二重構造について考察する。また、伝統的な母親像を確立し、植民地近代化のはざまでせめぎ合う「張述伊」の価値観、「僕」が記憶する母親像と祖母が語る「身勢打鈴」の中の母親像は、夫と支配国の抑圧と暴力に堪える装置としての作動だけではなく、植民地近代性の受容と風化しつつあった民族性回帰に繋がる女性像であることを明らかにする。

## キャラクターから入る文学作品

——解釈される作家たち——

文学研究科国文学専攻博士前期課程二年 郡 裕 子

近年では作家をキャラクター化した作品が人気であり、文学館などとコラボすることも多くなってきた。これらの作品は作家の作品よりも作家のエピソードや人間関係がメインとなる。こうした作品を通じてもとの文学作品に触れる読者も少なくない一方で、文学作品の文庫本のカバーをキャラクターのイラストが飾ることもある。

文学作品の近年の扱いはキャラクターとなった作家を知るための手段となり作家の付加価値となりつつある。また、権威化されていた作家は親しみやすいキャラクターとなり、難解そうに感じる文学作品を身近なものへと変えている。作品とは常に解釈されて利用されていくものであるが、作家自身も解釈されて利用される一つの作品になりつつあると言えるだろう。

何かを解釈する際には作家や文学作品の実像から乖離していく危険性は常につきまとう問題である。しかし、キャラクターの理解のために利用される文学作品は新たな解釈の仕方の可能性を提示するのではないか。今回は『文豪ストレイドッグス』と『文豪アルケミスト』を例に文学作品の受容のされ方の変化と作家という存在の価値がどのように変化していったのかを論じたい。

## 日中山中異界の比較

『山海経』と『常陸国風土記』を中心に

文学研究科国文学専攻博士後期課程一年 李 清 玉

中国經典の『列仙伝』には「赤松子というのは：しばしば崑崙山に赴き、いつも西王母の中に宿り、風雨につれて山を上下した（以下略）」といった人々に愛読されている名句が書かれている。その中には、山々を拠点とする仙人たちの話も綴られている。唐の詩人劉禹錫の『陋室銘』に「山は高きに在らず、仙有らば則ち名あり」とあり、中国人の山趣が經典の至るところに見られる。それに対して、『万葉集』には「事しあらば小泊瀬山の石城にも隠らばともにな思ひそ吾が背」という歌があり、万葉以来、後世の日本人に詠まれてきた（歌中の「石城」は「陵墓」の意である）。

そこで、本論は中国の地理書『山海経』と日本の地誌『常陸国風土記』を中心に、日中両国における「山中異界」の概念の異同を捉え、踏まえ、両国の異界意識とその違いを手に入れたと思う。日本文化が大陸文化を吸収する際の傾向を、「山中異界」を具体例として検証したいと考えている。そして、この検証の結果を踏まえて、日中比較文化の研究の手掛かりにしたいと思う。

## 『玄玉集』神祇部構成と配列

文学研究科国文学専攻博士前期課程一年 古 家 愛 斗

『玄玉集』は、建久二、三年（一一九一、二）に成立したと推定され、早い時期から撰者として隆寛、上覚説が提出されていたが、二〇一三年に中村文氏が隆寛説を補強された。

その一方で、集内部の構成は松野陽一氏『鳥筥 千載集時代和歌の研究』に代表される成果が出されて以降、特定の歌人の作品にかかわる問題として検討されることはあっても、ほとんど触れられることがないまま今日に至っている。

『玄玉集』神祇部は、先行研究によれば、神社別配列とされている。しかしながら、所々に神楽歌が挿入されている点、神社別配列とされている『千載集』等の他集に比べ、神社が一まとまりになっているとはいえない難点において独自性を有している。以上の点において、鎌倉時代初期の神祇歌を考える上で非常に重要な集であると発表者は考える。

本発表では、『玄玉集』神祇部の構成と配列を分析し、同時代の他の集に加え『後拾遺集』等の他時代の勅撰集等と比較することにより、『玄玉集』神祇部の特異性と鎌倉時代初期の神祇歌における独自の配列論理について論じることを目的とする。

## 「関東州」における中国人用教科書編纂事情と教材採録について

文学研究科中国学専攻博士後期課程一年 張 三一 妮

清末以来「学校系統改革令」の公示まで中国は大半が日本の教育を模範として教育の近代化に努めてきた。日本の対華二十一カ条要求以後は排日運動が高まり、中国は欧米へと接近するようになった。また同時に国権回復運動の高揚により、日本と中国の教育内容に根本的な違いが生じていた。

日本の「外地」「内地」における教科書の研究が近年盛んに行われている。制度上の「外地」として編入された「関東州」では中国人教育のため独自教科書が編集され、「国文(国語)」という教科目を避け「漢文」にした時期が長かった。一九二三年に関東州教科書編纂委員会『漢文読本』(全六巻)が発行され、一九二四年に南満州教育会教科書編集部『中国文教科書』(全十二巻)が発行され、「関東州」の公学堂、普通学堂で使用された。

本発表では中国人用教科書に対し編纂事情と教材採録について分析を行い、「関東州」における中国文教育を、「植民地性」が付帯する「外地」の現実の漢文教育としてどのように形成されたかを明らかにしていく。

## 日本語と中国語における比喩表現の比較

文学研究科国文学専攻博士後期課程一年 宋 睿

言語は人々の認識の問題にかかっている。そのため、日本と中国は隣国であるが、言語の違いがあつて、当然ではあるが、同じ文字による言葉であつても、同じように対象認識しているわけではない。その認識する領域に共通している部分もあれば、隔たりがある部分もある。したがって、同じ意味する領域の物事について喩えによつて詳しく説明しようとしても、日本人と中国人が用いる比喩表現が異なってくるのも当然である。その認識のずれが、文学作品とその翻訳に出てくる比喩表現に反映されていると言える。

本稿では、文学作品を研究対象にし、日本作品の原本とその訳本から比喩表現を取り上げ、それらの比喩表現が実際にどのような中国語に翻訳されているかを明らかにしたい。文学作品という用語表現の中の、特に比喩表現を分析することによつて、原作と翻訳でのそれぞれ日本語と中国語における比喩表現の共通点と相違点を明らかにすることを目指し、両言語の比喩表現に現れる表現領域に関する傾向を追求する。さらに、両言語における比喩表現の比較によつて、その表現が示す物事に対してどのように異なった概念領域をそれぞれ持っているかを明確に認識できるのではないかと思う。

〈講演〉

インド仏教の日本文学への影響 ——和歌、俳句を中心

仏教思想研究家 植木雅俊

〈講師紹介〉

植木 雅俊（うえき まさとし）

一九五一年生まれ。九州大学大学院理学研究科修士課程修了。東洋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。東方学院にて中村元に師事。二〇〇二年お茶の水女子大学で男性初の人文科学博士。東京工業大学世界文明センター非常勤講師、NHK文化センター講師などを歴任。専門は仏教思想。

主な著書・訳書に

『Gender Equality in Buddhism』(Peter Lang Pub Inc' 二〇〇一)

『梵漢対照・現代語訳 法華経』(岩波書店、二〇〇八) 第62回毎日出版文化賞

『仏教、本当の教え——インド、中国、日本の理解と誤解』(中公新書、二〇一一)

『梵漢対照・現代語訳 維摩経』(岩波書店、二〇一一) 第一一回パピルス賞

『思想としての法華経』(岩波書店、二〇一一)

『仏教学者 中村元——求道のことばと思想』(角川選書、二〇一五)

『ほんとうの法華経』(橋爪大三郎との共著、ちくま新書、二〇一五)

『テリー・ガーター 尼僧たちのいのちの讃歌』(角川選書、二〇一七)

『サンスクリット版縮訳 法華経 現代語訳』(角川ソフィア文庫、二〇一八)

『100分de名著 法華経』(NHK出版、二〇一八)

『差別の超克——原始仏教と法華経の人間観』(講談社学術文庫、二〇一八) など多数。

◆会場のご案内

二松學舎大学九段キャンパス一号館



- 東京メトロ東西線・半蔵門線、都営新宿線「九段下」駅下車、2番出口より徒歩8分
- JR中央線（総武線）、東京メトロ有楽町線・東西線・南北線「飯田橋」駅下車、徒歩10分
- JR中央線（総武線）、東京メトロ有楽町線・南北線、都営新宿線「市ヶ谷」駅下車、徒歩10分

〒一〇二一八三三六 東京都千代田区三番町六一十六  
 TEL 〇三―五九六一―三三〇四 (国文共同研究室)